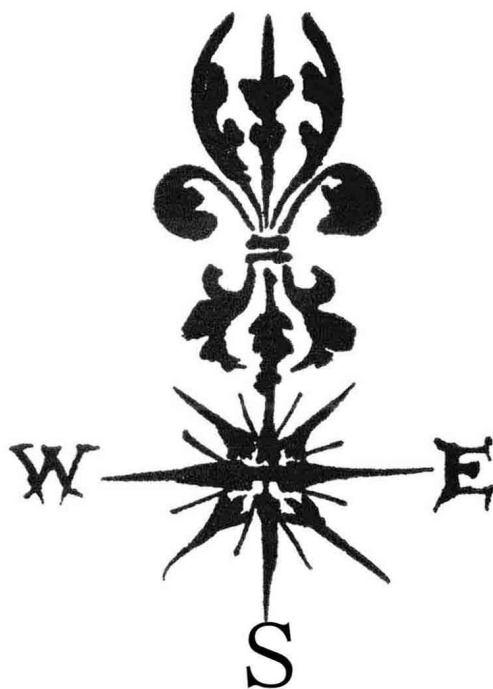


二本の銀杏



二 本 の 銀 杏

海 音 寺 潮 五 郎



新 潮 社 版

二本の銀杏

昭和三十六年一月十日発行

昭和三十六年三月三十日二刷

著者 海音寺潮五郎

発行者 佐藤亮一

印刷所 東洋印刷株式会社

製本 新宿加藤製本所

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

電話東京(34)七一一一(代)

振替東京八〇八番

定価 三七〇円

乱丁本はお取換えません。

目次

逃	散	七
夜	這	一五
星		
お国とあぐり		二六
時いた種		三三
魂のふれあい		四〇
海の風		四七
先祖たずね		五三
桃李の春		六三
山寒む		七〇
新しい計画		一〇四

月	雨	丸	お	忘	曼	さ	紅	渦	魚	量	呪	そ
お	晴	山		れ	珠	さ	い		によ	を着		の
ぼ	る	の	香	貝	沙	や	椿		する	た月	術	夜
ろ		月			華	き			心	の夜		
二三	二〇	一五	一五	一五	一五	一八	一九	一九	二〇	二四	三四	三四

スツボンの血	二四七
日暮れの雨	二五七
蛇	二六七
亢竜の悔	二七五
その前夜	二九〇
遠雷	二九四
花を砕く	三〇五
共犯者	三二三
月に思う	三三二
人こそ知らね	三四〇
雨しとど	三四二
光と暗	三五五
梢の星	三六三

装
幀
杉
本
健
吉

二^{ふた}

本^{もと}

の

銀^{ぎん}

杏^{あん}

逃 ちやう

散 さん

村は薩摩の北端にあった。肥後に境を接していた。山また山にかこまれた小さな盆地だ。海には一番近い道を行っても八里あった。

「赤塚ン衆は、海の魚は塩漬もんしか食うたことはなか。ピリツと舌を刺すくらいになったやつでなかと、よろこばんぞ」と、海近い土地の人々が笑っているほどであった。

村の中ほどに小高い山がある。南九州ではめずらしくない火山灰の堆積した台地で、雑木が生いしげっている。城山と呼ばれている。城のあったのは戦国時代のこと、江戸期に入ってからは一國一城の法規によって何もかも撤去されて、単なる丘になってしまったのだが、名称だけが未練がましくつづいているのだ。

この城山の麓に武家部落がある。薩摩藩で外城士とじやうさらいまたは郷士と呼ばれている人々の部落である。

外城士あるいは郷士は、藩士であるにはちがいないが、鹿児島城下に居住している城下士じやうかしとはずいぶんちがった生持を持っている。城下士は他藩の武士と同じく純然たる消費階級だが、

この連中は武士であると同時に百姓であった。作りどりをゆるされた土地、つまり無税の土地を私有していて、自ら耕作もすれば、下人と称する家来筋の者に小作もさせて生活している。彼らの身代はいろいろだ。自作の収穫と小作料を合わせると年間五百石も収入のあるほど豊かな者もいれば、せいぜい五十石か六十石の収入しかない家もあった。

しかし、彼らの住宅は、貧富を問わず、大体の規格があった。邸地は必ず路面から五六尺上り、広さは三百坪から五百坪どまり、まわりにこの地方に多い泥灰岩の切石の石塀をめぐらすか、子供の頭ほどの大きさの自然石を五六尺の高さに積み上げた石垣の上に、姫垣としてユス、カナメ、あるいはこの地方で金竹といっている蓬萊竹の生垣をめぐらしている。

家屋は邸地のほぼ中央にあって、四室か五室、せいぜい六室、屋根は多くは茅で厚く葺き、瓦屋根は至って少ない。

前園は梅・桃・杏・柿・蜜柑等の果樹園となり、後園は菜園となつて、自給自足の出来るしかけになっている。

身代に応じて白塗の土蔵がいく戸前とまへかあり、厩舎うまやもある。貧しければ耕作馬しか飼っていないが、豊かであれば乗馬も飼っており、厩舎にとなり合つて、この他方のことばでデクワン（田官？）と呼ばれている下男の寝場所もある。

赤塚村の郷士部落は別段にとり立てて言うほどの特色はない。一口に百二外城とじやうと称せられて、薩藩領内に百二の数があるといわれている郷士部落と、ほとんど変るところはないが、ただ一つ目立つものがあつた。

この部落の東西の両端に近く一本ずつ銀杏の巨樹があることであつた。東方のは郷土頭北郷家の庭先にあり、西方のは上山家の門側にあつた。ともに二百年内外の樹齡をたもって、おとな二人で手をまわしても一尺ほどあまるほど大きかつたし、部落の両端に七八十尺もの高さにそびえて空をはらっているさまは、落葉時にも、青葉時にも、黄葉時にも、それぞれにかなりな壯観であつた。

この物語はこの双樹のある両家からまつて展開するので、作爲にすぎないように、筆者としてはいささか気がひけるのだが、事実だから書かざるを得ない。この双つの樹は雄木と雌木であつたのだ。

ご承知の通り、ジュラ紀から生きのこっているこの植物は動物に近似した性質をもっている。晩春の開花期に雄木は花粉から精虫を出し、雌木の花は卵子をつけ、風にのって運ばれる雄木の精虫が雌木の卵子に付着して生殖結実するのだが、時として數里をへだてて交配し合うところから、昔の人にはずいぶん神秘的に思われたらしい。中国にも、日本にも、この樹にからまる神怪談が多数語り伝えられている。

北郷家の雄木、上山家の雌木であつた。好晴の日のつづく秋の季節になると、上山家の樹にのいて実がなり、やや強い風が吹くと、終日終夜、門の屋根、街路、庭、前園のきらいなく、精液に似た惡臭を放つ、半透明のどろどろな物質につつまれた実をおとした。

上山家では、それを丹念にひろいあつめて、どろどろを洗い

去り、ほし上げてきれいな実にして、半分を北郷家に、

「おかげで今年は豊作でこわした」

とか、

「今年は不作でこわした」

とかいう口上とともにとどけた。

すると、北郷家では、

「これはこれは、ごきんとう（金当・几帳面）なことでごわす。こちらは種をつけただけで、一向かまいつけもせん不埒をはた

らいていもすのに」

と、笑つて受け、かんたんな酒食をそなえて、主客軽く一酌する習わしであつた。先祖代々、もう何代もつづいていたのであつた。

天保八年の晩秋の一日、黄葉した大銀杏の葉が、明るく寂かな日ざしの中にしきりに散る午を少しまわつた頃、部落の郷土らの重立つた連中が十數人、北郷家の客間に居ならんでいた。

正面に主人の北郷隼人介、郷土らはその左右にカネになつて居流れている。木綿か、せいぜいつむぎだが、小ざっぱりとしたものを着、袴をはいてゐる。国の習いですそ短かだ。皆肩をそびやかせていた。これも國の習いだ。改まつた服装をする

と、つい兵児時代の氣を負うたすがたになる。

これは郷土なかまの、いわば長老格の連中で、腰がかがみ氣味になつたり、眉が白くなつたりしている老人が大半であつた。

敷居をへだてた下座敷に、この國で兵児といわれている妻帯

前の青年らが五人すわっていた。長老連も相当無骨な姿だが、兵兇らは一層粗豪な感じだ。手首から二三寸上るあたりまでしかないほど短く袖を仕立てた薩摩がすりの着物に白木綿の帶、うんと短くはかまをはき、腰に手拭をぶらさげている。

申し合わせたように脇差は短く、大刀は太く長く、直刀にまじり合はかりにそりが少ない。お家流儀とこの国でいわれている示現流にはこんな刀が適しているのである。

この若者らの中にただ一人、髪^{かみ}の結い方がちがって、月代をおかず総髪にして結い上げている青年がいて目立つたが、そればかりでなく、この青年はなかなか異色があった。

第一、体格が雄偉だ。ひきしまったからだは、たけが高く、肩はばがひろく、いかにも鍛えのきいた感じだ。第二に容貌がりっぱだ。大きくて光りの強い目や、高い鼻梁や、大きな口や、ひきしまった浅黒い頬が、おそろしく精悍な感じであった。年頃は二十五六と見えた。

青年らと同じように敷居ぎわに膝をそろえてすわっているのだが、何となく総髪の青年だけが他の青年と対立しているようなものが感ぜられた。

誰も一ことも口を利かない。長老らの間から、時々煙草盆をたく音が聞こえるだけであつたが、やがて、正面の北郷隼人介が、せきばらいとともに口をひらいた。

「ことからは各々ご承知のことでごわすが、順序でごわすから、一応、当事者らの陳述を聞くことにしもそうな」と、長老らをかえりみた。

隼人介はまだ三十四五だが、さすが代々の家柄だけに、容貌もりっぱであれば、性質もおだやかで、おのずから長者の風がある。

隼人介のとなりにすわっている小柄な老人が、白く長い眉をふるわせ、短気げにきせるで灰吹きをひっぱたいて、しわがれた声で言った。

「その必要はごわすまい。事がらはすではつきりしとる。事理をただす段階ではごわはん。罪の計量をなすべきでごわす。さっそくに裁きにかかるとるがようごわす。藩庁の命を奉じてやつとることを妨害したのでごわす。源昌房が悪いにきまっています」

うなずく者もあり、首をひねる者もあった。

隼人介は決して無言であつた。

総髪の青年は端然とした姿勢で、膝に手をおき、目を閉じていたが、その目をみひらき、キッと老人を見て言った。

「市郎右衛門サアは心得ンことを申さるる。拙者は、今日はお裁きとのご通達をいただいて、こうしてまかり出たのでごわす。裁きとは悪いが悪くないかを決定することでごわす。しかるにその以前、拙者が悪いと仰せられるとは何事でごわす。士分の者にたいして、無礼とはお考えにならぬか。仮に百歩をゆずって、すでに罪科ありと決定されたとするならば、その罪の計量に罪人たる拙者が列席するといふことがごわしうか。年甲斐もなことを仰せらるる」

調子はおだやかだが、意味はしんらつてあつた。

老人は腹を立てたが、言いかえすことが出来なかった。無暗に煙草を吸っては、はげしく灰吹きをたたきつける。

隼人介は青年のことを至当と認めたが、それでもおさえ

た。

「ゆるしなくして発言してはならん」

「は」

青年はまた瞑目のすがたになった。十数年この方、薩摩は百姓の逃散が相ついでいる。民政の悪さから取り立てがきびしいからである。三面を海にかこまれて、いる国だから、中部以南では逃げるのが困難なため、苦しうもとどまっているが、北部は陸続きで他領に近い。逃散者が相つぎ、耕す者のなくなった耕地が無暗にふえ、それが急速に原野化しつつある。

田租を最も主要な財源としている封建大名の経済はこれではなり立たない。

藩政府はきびしい取締り令を出し、国境地帯の郷士らに命じて、これを取締らせている。

赤塚村の郷士部落から三里ほど離れた地点に、関所がある。

国境の峠道から少しさがった谷間にあるのだ。赤塚村の郷士らの藩に負うた最も大きい任務は、関所を守ることだ。先祖代々、彼らはこの任務を負うている。だから、十日目毎の交代で、ここに出かけている。

薩摩は秘密の国だ。特別に藩の許可がないかぎり、他国人を一切入れないきまりになっている。赤塚村の郷士らが、関所番

を最も重い任務としている以上、単に関所だけを守っていればいいというはずはない。関所以外の国境線をこえるものはみな関所破りだ。藩から特別なさしずがなくても、とりしまらなければならぬ。ご領内の百姓らを逃散させるなど、職務怠慢と責められてもしかたがないわけだ。彼らは恐れ入ってお受けして、それぞれ受持区域をきめて巡回をはじめた。もう十年から上にもなることだ。

ところが、昨日のことだ。ここにいる四人の青年らが受持区域の山中を巡視していると、男女子供まじり十人ばかりの百姓らが、それぞれに鍋釜や衣類包みらしいものを背負って、谷川沿いの細道を、球磨境の方に行くのを見つけた。そこで、追いかけた。

百姓らはさとして、飛ぶ速さで逃げ出した。こちらはそう出ることを予想していたので、一人が先きまわりしていると、その鼻先きに逃げて来た。

「とまれ！」

おどり出してとなりつけると、一行のうしろをまもって逃げて来つたあつたひとときわ屈強な百姓が駆けぬけて来て、柄長の山鎌をふりかざして抵抗する氣勢を見せた。

こちらはかっとなった。

「なまいきな！」

刀をぬきはなつて、斬ろうとしたところ、とつぜん、上の崖から長い棒が飛んで来て、目の前におちてはずみ上った。

驚かんわけに行かん。

「あっ！」

と飛びずきると、おりあしくそこは谷川のふちであった。足
をふみすべらせ、しぶきを上げて早瀬にころがりこんでしまっ
た。

そのすきに、百姓共は足のかぎりに逃げる。あとのものが追
いかけたが、つい一二町で球磨の領分だ。ほんの少しのことで
追いつけなかった。百姓らは、球磨領に入ってしまった。

すでに他領に入ってしまった以上、ふみこんで捕えるわけに
行かない。必ずあとでとえらいめんどうがおこる。齒がみしな
がら引きかえた。

百姓らをとりにがしたことが口惜しかったのは言うまでもな
いが、崖の上から六尺の金剛杖を飛ばしてじやましたのが郷士
なかまの源昌房であったのは、意外でもあれば、心外でもあっ
た。

源昌房はその日の巡回なかまではなかった。彼は二日前に、
一年ぶりに上方^{かみがた}からかえって来たばかりというので、まだそう
した勤務は免除されているのであった。だのに、彼はいつそこ
に来ていたのか、ものものしい修験者姿で崖の上に突っ立って
いて、かんじんの時、突如としてじやまをしたのである。

青年らは腹を立てて、源昌房をなじったが、源昌房は、
「おい百姓共を逃げさせようと思うてたのではなか。おい
はただ、おはんらがあの百姓を殺そうとするのをとめようとし
ただけのことじゃ。思いもかけん結果になって、百姓共をとりに
がさせたことはまことにすまんが、おいの真意は唯今申した

通りじゃ。聞きわけてもらいたか」

という。

しかしながら、もし源昌房がその言う通りの心であるなら、
彼もまた百姓らを捕えるべく追いかねばならなかったはずで
あるのに、さらにその風はなかったと、青年らには思われた。
そこで、郷士頭^{がしら}に訴え出たので、郷士頭は長老らを召集し、
当事者ら呼び出したという次第であった。

ここで、かんたんに源昌房の身分について説明する必要がある
ようである。

薩摩に兵道家^{へいどうか}というのがある。武士と山伏を兼ねている者^{もの}
である。これを兵道家^{へいどうか}というのは、戦さの場合、陣中で敵軍を呪
詛調伏^{さうぶく}する修法を行のうことを職とするからである。呪詛や調
伏などということがはたして効験のあるものかどうか、今日の
常識ではもちろん信ぜられないが、この時代にはかく信ぜら
れ、疑うものは一人もなかった。

彼らは城下^{さむらい}士の中にもいれば、郷士中にもいる。平生は髪
を総髪^{そうがみ}にしているだけで、普通の武士とかわらない服装をして
いるが、宗教上の儀礼の時だけ、修験者の服装になる。

彼らのあるものは神社の別当をかねているが、そうでないもの
もいる。神社を持たないものは、屋敷内に大日如来を祀った
堂を持ち、朝夕その前で勤行^{ごんぎやう}するのである。

源昌房はその兵道家であった。本名は上山^{かみやま}一平久経。部落の
西のはずれにあるあの大銀杏のある上山家の当主であった。こ
の時二十六歳であった。

隼人介がせきばらいとともに、

「順序じゃ。やはり一応陳述を聞かんければ、話の進めようがなか」

といって、原告たる青年らに發言をうながした。

「わしが總代で言います」

と、一人がよどみのないことばで、きのうのいきさつを述べた。

「つぎはそなたじゃ」

隼人介は源昌房に命じた。

源昌房は、きのう若者らにしたと同じ弁解をくりかえしたが、さらに言いそえた。

「拙者は百姓らをあわれと思うのでござす。各々方もうわさには聞いてござしょう、天保と年号が改まってこの方、東日本は災厄つづきでござす。あるいは長雨のため、あるいは冷害のため、不作の年がつづき、米の値段が天井知らずに騰貴し、田舎では百姓一揆しきりにおこり、江戸・大坂・京などでは、打ちこわしとて、窮民らが大量して米屋や富豪の家を襲撃破壊することばかりかえされたのでござす。

これは三年までのこととござすが、四年になると、また冷害のため、九州をのぞく諸国一円の凶作となり、奥羽と東山道とはとりわけはなはだしく、文字通りに一粒もみのらず、餓死するもの數万、人々相食むという惨烈なこととなりました。田舎だけではない。將軍家のお膝もとであり、天下の物資の集まる江戸の市中にさえ餓えて死ぬものが出る始末。この時もまた大

都會には打ちこわしがおこり、田舎には百姓一揆がおこりました。

五年、六年は平年の作がらでござした故、一応の小康は得ましたが、去年はまた夏の土用に冬着物を着ねばならぬほどの年であつた上に、大暴風雨におそれれた国々が多かつたため、中国路から東の国々はまたまた飢饉となり、一揆のおこつた国々は一々數えきれぬほどでござした。米不足に乗じて悪商人どもが恥知らずに米価をつり上げますので、京だけでも餓死したものが五万六千人をこえたと申す。ついに、今年になって、大坂では大塩平八郎が悪役人と悪商人共とを征伐するを名として兵亂をおこすに至つたのでござす」

だが、その快弁は、突如さえぎられた。

「ようまわる舌じゃのう。しかし、わしらも皆知つとることじや。こと新しかことのように言うことはなか」

さつき源昌房に言いつめられた眉の白い老人であつた。にがにがしげな顔をしていた。

源昌房はひるまない。

「いかにも、みなさまご承知のこととござす。しかし拙者は見て来たのでござす」

貴殿ら是不作でもなければ凶作でもない平和な土地にいて遠いうわさ話に聞いているにすぎなからう、拙者はこの目でまざまざと見て来たのだ、感銘がちがうと言いたげであつた。

老人は負けてはいなかつた。せせら笑うような調子で言う。「なるほど、そなたは見て来たろう。一年の余も京の本山にい

たのじゃから。じゃがだの、そなたが今長々としゃべり立てたことと、昨日そなたがしたこと、一体なんの關係があつたのじゃ。昨日のことは、よその国の飢饉などとはなんの關係もなかつたことじゃぞ」

源昌房はむっとしたようであつたが、わずかに微笑して見せた。

「もう少し言わせていただきます。――拙者は先刻、百姓らをあわれと思うと申しましたが、先ずそのことをお心におとめおき願ひたい。以上申し上げた東日本の飢饉・一揆・打ちこわし等は、申さば天災でござす。もちろん、かねての政治の不適當、悪商人共の貪欲等も手伝っている点はござすが、大方は天災と申してよろしい。

ところが、当九州、とくにお国は暖国のことゆえ、冷害ということを知らず、ために不作もなく、凶作もありませなんだ。だのに、打ちこわしや一揆などの不祥事こそなけれ、年々に百姓共の逃散がつづいていもす。

人間は誰でも生まれ故郷が好きでござす。山にも川にも、一木一草に、先祖以来のゆかりがからみ、なつかしさがこもっている。これを捨てて、なじみのなか他國にさすらい行く者がこの十余年絶えぬとは、なにが故か。尋常一様のことではござはんぞ。各々方によく考えていただきとうござす。

拙者が百姓をあわれと思うたと申したのはこのことでござす。拙者は百姓を逃がす氣はなかつた。ただ殺されるのを助けたいとばかり思うたのでござす」

源昌房は口をつぐんで、しずかな目で人々を見まわした。どんな反應を見せるか、觀察している目つきであつた。

青年の一人が、源昌房の方に、ぐいと膝をねじ向けた。

「おはんは何を言おうとしているのじゃ！ 藩の命令より、百姓のいのちを重しとなさるのか！」

怒りに赤くなり、かみつくようなはげしさであつた。

源昌房の大きな目がピカリと光つた。頑迷な相手の態度に、おさえにおさえていたものがせきを切ったかと思われる様子であつたが、おさえて、おだやかな声で言つた。

「新兵衛どん。氣を静めて、よく考えた上でのを言うて下され。おいは、百姓共を逃がす氣はなかつた、ただ殺されるのを助けたいだけ思うていたと言つたのでござす。それがどうして藩の命令より百姓のいのちを重しとなすということになるのでござす。逃散を制止せよとの藩命ではあつても、殺せとの命令はござすまい。

ただ不幸にして、おはんが足をふみすべらせて谷川におちみなさつたために百姓らがこちらの手のとどかん他領に逃げこんでしもうたいうにすぎん。

だから、濟まなんだとわしはわびを言うたのじゃ。おはんら四人が了解してくれば、ことはそれですむのじゃ。こげんところを持ち出して、お頭をはじめ長老ン衆をわずらわし申すことはさらになかのじゃ。この理窟がどうして、おはん方にはわからんのか」

じゅんじゅんとさとするような調子であつたが、相手は納得し

ない。一層激昂した。

「おいが谷川に落ちこんだのが不覚じゃと言やるのか！ そいじゃ、おいが悪いと言やるのか！」

さすがに、源昌房もかっとした。

「ばかもの！」

と、猛烈な勢いでどなりつけ、さらにつづけた。

「石頭にもほどがこわすぞ！ 新兵衛どん、おはん、いくつだ！ その若さで、どうして人の言うことを素直にとることができんじゃ！ お国のことを思うなら、もう少し広く深く考えたらどうでこわす。憂うべきを憂えず、あわれむべきをあわれむことができんような固陋頑迷な根性では、若い者とは言えんとは思やらぬか」

相手はいきり立った。

「謎立てのような言い方をせんで、はっきりと言いなされ。憂うべきことは何じゃ！ 返事の次第では聞きずてにはせられんぞ！ 先刻からのおはんのことはゆゆしいにおいがある」

源昌房はもう昂奮がしずまっている。

「おはん、礼記を読んだな。おいと一緒に習いに通ったことを覚えていやろう」

「習うても覚えてはおらん！ おいはおはんのような学者ではなか。薩摩の武士には学問などとは形ばかりでよかことじゃ。お国にたいする忠義だけを心得ておれば十分じゃ」

ふりふりしている。

源昌房は微笑した。

「忘れてるなら、くわしく言おう。大いになることじや。——礼記の檀弓篇にこげん話が出る。

孔子が旅をして、泰山のほとりを通りかかったところ、一人の婦人が新しい墓の前で泣いていた。その泣声があまりに悲しげであったので、孔子は車をとどめて、こうおたずねになった。

「そなたの泣声を聞いていると、度々かなしい目にあった人のようじゃが、一体どんな目にあったのかな」

女はこたえた。

「仰せの通りでございます。このへんは悪い虎の多いところでございます。その虎のため、昔わたくしの舅どのが噛み殺されましたが、この度また子供が食い殺されてしまいました。それでこんなになしんでいるのでございます」

孔子は言われた。

「そんなにおそろしい土地なら、どうして他に移らんのか」

女はこたえた。

「ここは虎の害はありましても、無慈悲なお取り立てがございせんので」

孔子は嘆じて、お供していた弟子衆に仰せられた。

「そなたら、よくおほえておくがよいぞ。民にとって、苛政は虎よりもおそろしいものであることを」

どうだの、この話を聞いて、今のお国のことを思い出しはなさらんか」

話が進むにつれて、人々の顔は青ざめ、おびえているような表情になっていたが、ここまで来ると、一斉にざわめき立った。